

巻 頭 言

ご 挨拶

会長 関田 一彦

(創価大学教育学部長)

COVID-19との戦いも3年目を迎えています。ウィルスも変異し続けていますし、私たちの対処の仕方も次第に変わってきています。人は経験から学び、未来に備えます。

教育学会が支援する「東アジア学校カリキュラムと教授法研究大会」が昨年12月27日・28日に、中国の海南師範大学をホスト校にして、オンラインで行われました。実は一昨年、緊急事態宣言が繰り返される中、第2回大会の開催可否を巡り検討した結果、私たちは創価大学を会場にオンライン開催に挑戦しました。同時に複数のセッションが行われる中で通訳をどう配置するか、通訳や発表原稿翻訳にかかる大会経費をどうするかといった運営上の課題に取り組む中で、オンラインによる国際大会のノウハウ・経験値を積むことが出来ました。今回(第3回大会)はそれを踏まえ、中国側に寄り添う形での開催となりました。コロナ禍であっても、日中両国はもとより、アメリカ、韓国、台湾など東アジアの国々を中心に複数の研究者や教育者が交流する機会となりました。そして、私たちはこの大会からも多くを学び、新年度に向けた新たな展望を描き始めています。創価大学教職大学院と中国首都師範大学の教員間の交流から生まれた大会が、コロナ禍のものともせず3年連続で行われ、新しい交流の可能性を広げていることは、本当にすごいことだと思います。

私たち教育学会はとても小さな団体です。にもかかわらず国際大会だけでなく、会員の研究発表の場である研究大会も今回で20回目となりました。在学生だけでなく、本学卒業生にとっても貴重な研究成果発表の場となっています。また、本誌も今号が31号となり、この規模の会としては類を見ない実績を重ねています。今号発刊に際しては10本の投稿がありました。全国の会員が日々、精力的に教育・研究に励んでいる証でしょう。査読の末、4本が掲載となりましたが、丁寧な査読が行われ、本誌の学術的な質が保たれています。

ではなぜ、このように良質な活動を半世紀近く続けてこられたのでしょうか。本会は1976年に教育学部の創設と共に結成されました。その当初から学部教員だけでなく、学生も会員として参画し、初期には学部生論文・制作集も刊行していました。創価大学は学生中心の大学であり、学生は大学建設の一端を担う自覚のもとに、学問研鑽にも取り組んできたのです。教員たちはこの学生の主体性を大切に、学生の参画を励ましてきました。本会を支える運営委員の多くは本学の卒業生であり、自らがこうした伝統を肌身に感じて学生時代を過ごした方たちです。私はこの伝統が本会の強みであり、営々と続く良質な研究活動を可能にしている原動力ではないかと思っています。

「源遠ければ流れ長し」と言われますが、大海に向かって山を下り野を拓く流れの途上に紆余曲折は自然であり、そこで得た経験が流れを豊かにしていきます。コロナ禍初年の昨年度は運営委員会を総会に代え、今年度はオンラインによる総会となりました。おかげで様々な制約を超えて色々な方が Zoom にアクセスしてくださいました。中には入院中の病床から参加された方もおられました。コロナ禍3年目となる22年度、私たちは多くの在學生、卒業生とともに、after コロナの時代の新たな挑戦と学びを重ね、今から5年、10年経てみれば、コロナ禍が本会発展の大きなきっかけだったと思えるような、新年度にして参ります。